

手術の日

石川
悌義

日芸文芸楊七三

私たちを食べていく。まだ先の粒が口に残っている内から次の粒、次の粒と手を動かし続ける。口をとがらせてチュウチュウ鳴らしながら次の粒、次の粒へと。私はつままれて口の中へと放り込まれる。チュウチュウ聞こえて、真っ暗。

口の中にたまった種を全部いっぺんに吐く。ザクロはダメだ。いくら食っても満足できない。扉が叩かれる音。

「どうぞ」

「今日の患者が到着しました」

「わかった」

立ち上がって背筋を伸ばして、皿を手にしてザクロの種を窓から捨てる。

お腹を空かせた子供たちの顔。向こうでなにかがパラパラと落ちた。食べ物。地面には白い粒が散らばっている。ほぼ無臭だがかすかに甘さとすっぱさの残り香がある。でも、食べられない。子供たちの顔。頭を高く上げる。草むらはピクリとも動かない。人間や車の行き過ぎる音が遠くでする。髪が風で揺れる。草が揺れて、揺れてネズミだー急いで顎を地面につけて身を縮める。ネズミは地面にせり出した木の根の上に乗れり降りしたり、草の間に鼻先を付けたたりしてうろうろしている。後ろ足を踏み切る。ネズミも急発進する。木をすり抜け

て、草むらは土に変わりネズミが走る。建物の角を曲がり、直進していく。ネズミだけがはつきりと見える。ぐんぐんネズミの尻が近づいてくる。前足の届く距離にまで。前足の爪がネズミの背中に食い込む。つんのめってネズミともみくちやになる。口に広がる血の味。子供たちの喜ぶ顔。

猫が転がってきて、地面に伏せた。ネズミを押さえつけている。野蠻な畜生だ。だがこれも自然の摂理なんだ。自然に慈悲も残酷もない。人間がこの二つを持ち得ているのは自然の道理から抜け出すことに成功したからだ。この成功は人類の努力の上に成り立っていて、また完全ではない。地震や台風や火山なんかで大量に人が死ぬとき、我々人類は未だに人類が自然の支配下にいることを思い出す。そうは言っても、それで支配からの解放をあきらめてはいけない。必ず人類は自然を超越できる。そのためには人類が人類のためのルールを徹底しなくてはならない。経済学の成果によると、人間は放っておけば格差を産みだす。つまり格差とは人間にとって自然なのだ。毎年貧困で何人もの人が、幼い子供までもが死んでいく。これを自然だからといって諦めていいはずがない。この世に神はないんだ。人類のことは人類が救わなければいけない。助け合わなければいけない。そのためのルールだ。ルールは守らなければならない。なぜあいつらは足並みを乱すのだろう。みんなの幸せのために、格差のない真の平等、すべての民族の融和のために必要な規則だというのに。だからきつと、足並みをそろえない者たちは他の民族にとって害悪だ。そしてそれを意図的にやっているのなら、それは

他の民族、コミュニティへの攻撃に他ならない。人格がけがれている。ルールを守らないものには罰がある。当然じゃないか。守っているものには安寧がある。それに、かつて無法者だったものでも、適切な処置をうけて、正しいものになれば安寧と幸福を享受できる。そうでない国たつていくらでもあるのに、なんて同志は心が広いのだろうか。その仁心はこの広い空を包んでいる。あの女もきつとその慈悲深さに感謝することになる、今に適切な処置を受けてここから出てくれば、猫は歩み去り、地面に血のシミができている。我らが血肉、倒れていった英雄たち。この国を守らなければならない。蠅がシミの周りを飛び回っている。糞便、動物の死骸、うごめく大量のウジ。血だまりを土で覆えば、蠅は失せるだろう。

血の匂いは土の匂いへと変わった。人間は土を蹴り続けていた。近くの車に砂埃がかかっている。通りかかった二人連れの内、一人がその様子を肩をひそめて観察し出した。もう一人がその脇を小突いた。二人ともうつむき、足早に過ぎ去った。建物の脇の草むらにザクロの種が幾粒も落ちていた。種にわずかに残された果肉と、果汁、それから人間の唾液に小さな中たちがたかっていた。すべて食らいつくすと種は真っ白になり、土へと沈んでいった。風が吹き、糞尿の香りがする。まばらな草原の岩の影に糞があり、そほでは羊が交尾をしていた。羊は群れでいて、近くの出石に人が座っていた。草原を過ぎると、土色の建物が並び、端に重機があり、コンクリートに固められ、高層ビルが立ち並ぶ。鉄格子と有刺鉄線に囲まれた建物の二室では一人が黒板の前

で話していて、人々はそちらを向いて座り、手元の本か前の一人に目を向けている。その内の一人がふいに顔を上げてこちらを見た。

窓枠に蠅がいて目が合った。蠅は手をこすり合わせている。ここで本を置いて手をこすったら、教師に殴られる。蠅はきよろぎよろと顔を動かしている。

「どこを見てる！」

「すみません」

本を見る。本だけを見る。教師から熱い風が吹いていて、頭が焼けそうだ。本の上で線と線はつながりを持って意味を成そうとする。「富」教師から発せられる音も連関しようとする。「愛」本を持つ手の指を伸ばして線をランダムに隠していく。耳を塞げば、今度こそ教師は私を殴る。家族の姿で脳内から音の連関を追い出していく。「自由」「平等」追いかけて遊ぶエクパルと「公正」マードン。ここでこうしている間にも二人は成長している。近所の女性たちと買い物かごを提げて「法」おしゃべりする「治」アイハン。アイハンの膨らんだ腹。私の帰りを待つ家族たち。ここから出たら、エクパルはよりお兄さんらしく、マードンは学校へ行くようになっていだろう。アイハンは腕に赤ん坊を抱いているだろう。

「おい！ お前なぜニヤニヤしてる！」

張り裂ける家族たちの姿。教師の細い目。獲物を狙う鷹。

「すみません」

「すみませんじゃない。読め」

「はい。私は国を愛しています。私は五星紅旗を愛しています。富強、民主、文明、和諧、自由、平等、公正、

法治、愛国——

病院からあの女が出てきた。もうあの女が罪を犯すことはない。胸に空気が多く吸われ、吐きだされるとともに肩回りと顔の肉が下がる。バックミラーに肩章の星が輝いている。

あの車がまた停まっていた。中で制服を着たあの男が自分の肩を撫でている。瞼が閉じ、眉間にしわが寄る。顔をそむけ、進行方向を変える。お腹が痛い。お腹が軽い。またあるはずだった重さ。アブドゥラマン。帰ってきてこの事実を知ればアブドゥラマンはきつと怒るか失望する。家に残されたエクパルとマーダン。二人は不安でそわそわしている。あるいは泣きわめいている。急がなくちゃ。お腹が痛む。あいつらの顔。憎たらしい！この先あいつらが私たちにどれだけ詫びても取り返しはつかない。我が物顔で私たちの土地を歩き回り、家々を壊して回るなんて。私たちの未来を、奪い去っていくなんて。滅びろ。全員の首を掻き切つてやる。